

中村素堂

ただしいていえば、回教徒の聖典コーランのミユアチュールの挿入された豪華本だけは、日本の歌集なども及ばないが、しかし、これは宗教の經典で純然たる文学のものとはその本質において全く別個のものである。

こうやってご馳走のように歌の料紙が美しいと並べたててきても、やっぱりこれは中国詩箋と同じく、直接音楽とは結びつかないのであつた。

ところが短歌の古写本の一部とか、あるいは升形本などと呼ばれる小型本の一ページがちょうど色紙のように見える本などには、よく「散らし書き」といわれる三十一字を随意に切つてなん行にも上げ下げて書かれているのを見かけるのである。

これは帖ばかりではなく、懐紙という正式に短歌を披露するための大型の料紙にも、また近世になると色紙・短冊にさえこの散らし書きは流行して、短歌は「ちらし書き」で書くべきものであるかのごとき観をなしている。

そして、これに関する書道上の伝承もいっしか決められて、「三行三字」であるとか「雁の乱れ」とか「木立」とか、あるいは「下がり藤」とかの原則を基として変化してゆくべきものとか、といったような型があるようにさえなっている。

現代書道の世界でも、大体こんなことを踏んまえて、軽重・長ささまざまに散らし書きが行われ、文学だけの立場からでは、これをどうつないで、どこから読み始めるのか、読み継ぐ見当もつかないという嘆きも聞くのである。

全く見る芸術としての歌の散らし書きは、何とも見飽かせない興

味の深い芸で、これが三十一字くらいのものでできる芸とか、線の芸術の世界の蘊奥に惹き入れられてしまうことも多い。

しかし、この「散らし書き」というものは、一体どんな必要から、あるいはどんな思いつきから始まったものかと考えてみても、この至るの出発点は一向に見当もつかないまままで相当の時日を経過してしまつた。

上述の歌を書く料紙の図柄の発想は、当時中国から輸入した唐紙の文様などに端を発したものだろが、日常の服装とか調度の中にある浮き織りの文様とか、蒔き絵・象嵌の図柄が地模様とか上絵のヒントのひとつになつたでもあろうが、むしろ相互に啓発していたと考へてもよいのかも知れない。

上臈の乗る車の簾から少しはみ出した、いわゆる女車の出し衣のあでやかさが、美しいうねりを持ち、重ね衣のさまざまな色の配合の上になり立っているのを見つけて、これが継ぎ色紙、破り継ぎ、重ね継ぎのヒントになつたと考へられているのは、まことに的外れではないようである。

こんな風とその書写の美の周りのものを眺め回しているうちに、歌の出発点に考へ及んできて、歌は元来唱うことで、読む文学・見る文学ではなかつた。これは声の芸術として出発したのだと考へてみて、短歌の類の唱われているもの、またはこれから出発した今様のようなもの、琴うたなどまで考へてみたり、あるいはどこの国もそうであるように、国民的な歌は、大体その国の宗教の匂いをもつもので、西欧の音楽はほとんど讚美歌に出發するように、日本のものは仏典の声明、すなわちお経の節づけに始まつたものが多い。

と回り回つてきて、どうも「散らし書き」は、唱われる歌の節や声の切りどころ高低などを書き表してみたところに、出發したものであるのではないかと考へてもみた。(つづく)

〔書の手帖〕昭和四十六年一月

〔筆間雜記〕中村素堂隨筆集(昭和六十三年刊)より転載。